

# まなびと



## もくじ

教員養成大学における小学校社会科の学習評価の指導に関する一例 ..... 2

### 特集 日常の社会科授業を見つめ直す PartⅣ

資料の集め方・見せ方・使い方 — ウェビング図を用いた授業づくり ..... 6

「学んで楽しい」「教えて楽しい」社会科授業を広める  
— 「問題解決的な学習」を一般的なものにする取り組み ..... 11

### 実践紹介

防災の取り組みに対する参画意識を高める授業のあり方  
— 第5学年「自然災害の防止」の実践を通して ..... 15

# 教員養成大学における小学校社会科の 学習評価の指導に関する一例

北海道教育大学准教授 さかい 坂井 せいすけ 誠亮

## 1 はじめに

教師の授業力とは、子どもに学習内容をいかに楽しくわかりやすく教えるかという指導力と、個々の子どもはいったい何に興味や課題をもち、それが取り組みによってどのように変容したのか、また、どのような成果と課題を残したのかを的確に見取る評価力が絡み合った力のことである。しかし、これまで大学の教科教育法では、教育内容や教材開発、指導案作成といった指導力育成に重きを置き、評価力育成について十分に行ってきたとは言い難い。

もっとも、評価という行為は、子どもの存在（事実）なしでは成り立たないものであり、大学の教室において評価について実践的に学ぶには限界があるのは確かである。ゆえに、社会科教育法では、指導要録で示されている四つの評価観点や評価場面（診断的評価・形成的評価・総括的評価）、評価方法の概要についての説明で終わる場合が多いのである。

そこで、筆者が担当する小学校社会科教育法の授業では、評価の概要についての講義だけでなく、

パフォーマンス評価（表1の③）におけるルーブリックの作成と、評価テスト（表1の①と②）の問題作成といった演習を取り入れ、より実践的な評価力を養う授業を試みてきた。

本誌面に於いて、その一例について紹介したい。

## 2 パフォーマンス評価のルーブリック作成

子どもの思考・判断を評価する方法としては、従来はペーパーテストが主流であった。しかし、ペーパーテストは、既習の知識をもとに出題しなければいけないという意識から、たとえ「なぜ疑問」について文章で記述させる問題を出しても、それは子どもの知っている知識を想起させる知識・理解の問題であり、真に思考・判断させる問題であるとはいえない場合が多く見受けられた。

そこで、学びの文脈に沿って、より純粋に子どもの思考・判断・表現を評価していく方法として、近年、パフォーマンス評価が注目されてきた。しかし、パフォーマンス評価は、教師の主観に頼った評価に陥りやすく、妥当性と信頼性を高めるために、より質の高いルーブリックを作成することが要求される。そこで、本授業では、パフォー

表1 評価方法の分類(筆者作成)

筆記テストによる評価	①客観テストによる評価 多肢選択問題・正誤問題・穴埋め問題・短答問題等	知識・理解、技能に有効
	②記述テストによる評価 作問法・描画法・KJ法・概念地図法を用いた記述問題	技能、思考・判断・表現に有効
パフォーマンス評価	③完成された作品の評価 小論文・レポート・ポスター・脚本・絵・新聞・小説・詩・朗読・口頭発表・演技・ダンス・演奏	思考・判断・表現、関心・意欲・態度に有効
	④観察や対話による学習のプロセスでの評価 活動の姿の観察・話し合い授業での発表の内容・学習ノートや日記の記述・面接	思考・判断・表現、関心・意欲・態度に有効





▲グループでのモデレーションの様子

まずこの学生は、「次につながる課題が書けているか」という基準をもとに、①の作品…A評価、②の作品…B評価とした。しかし、同グループの他の学生たちは、「①…A、②…A「調べたことを自分の言葉で書けているか」」、①…C、②…A「論理立てて書けているか」というように、それぞれの評価とその基準自体が異なっていたのである。

そこで、まず評価の観点をどのように統一するのかについて話し合った。そして、「遠隔医療についてわかっているか」と「それについて自分の意見が書けているか」という2点を基準に定め、二つとも満たされていればA評価、どちらか一方が満たされていればB評価、両方とも満たされていなければC評価というルーブリックで、改めて作品を評価し直したのである。その結果、①の作品…B評価、②の作品…A評価と結論づけたのである。

しかし、このグループの評価には、以下の点で課題が残る。統一した二つの基準のうち、「遠隔医療についてわかっているか」というのは知識・理解の基準であり、「それについて自分の意見が書けているか」というのは思考・判断・表現の基準である。そのため、このまま観点別の評価とすることはできないので、改善する必要がある。

学生たちは、この授業のふり返りとして、次のようなことを書いている。

- ・自分で考えて評価したときは、表面的にテーマに沿っているかしか見られていなかったけど、グループで話をしてみると、文章から意欲をくみ取ったり、調べているかを感じ取ったり、ぱっと見ただけでわからないことまで考えていて大切だと思った。
- ・自分の考えと人の考えを混ぜ合わせることは大変であるが、大切だと感じた。同じ学年の先生方と協力していくとはこういうことだと感じた。
- ・グループで話し合うことで、自分では気づけなかった良い点や改善点などが理解でき、評価の視野が広まったと思います。評価というのは、自分の見る幅を広げなければいけないと痛感しました。

### 3 筆記テスト評価のテスト問題作成

小学校の教育現場は、学級担任が多くの教科を教えなければならないということから、学習評価を市販のテスト問題に頼っている場合が多い。そのため、地域教材を扱うことが有効な小学校社会科においても、教科書に準拠した市販のテスト問題の内容に縛られ、それがよりよい授業開発の妨げになっているのも事実である。また、テスト問題作成は、単元でつけたい学力を具体化する作業であり、質の高いテスト問題を作成することは、質の高い授業づくりに通じるものである。以上のことから、学生にテスト問題作成の体験をさせることを目的とした演習を行っている。

まず、学生に知識・理解、技能、思考・判断・表現における質の高いテスト問題の実例を紹介した。次に、それぞれの観点の特性（知識・理解…身につけた知識や概念の記憶を問う、技能…資料の正確な読み取りを問う、思考・判断・表現…既存の知識や資料の情報をもとに、事象の因果関係を問う）について説明し、先に示した実例をもと

ひろしさんは、元寇についてまとめたノートの一部をよごしてしまい、字が読めなくなりました。消えた部分には何と書かれていたのでしょうか。正しい文を①～③から選び、( ) に書きましょう。

ひろしさんのノート

御家人たちは2度にわたって元軍と命がけて戦いました。

しかし

鎌倉幕府に対して不満をもつようになりました。

- ①火薬を爆発させる新兵器を使う元軍に苦しめられたので、
- ②ほうびの土地をもらうことができなかつたので、
- ③幕府の執権北条時宗は、九州で元軍と戦わなかつたので、

答え ( )

に妥当性について検証した。さらに、学生が作成したテスト問題を評価する上での基準 (①妥当性のある知識・理解、技能、思考・判断・表現の問題であるか、②有効な資料が付けられているか、③ストーリー性があり、おもしろい展開になっているか) を示した。

図3は、学生が作成した思考・判断・表現のテスト問題である。

この問題は、御家人が鎌倉幕府に不満をもつようになった理由を問うており、自身もつ情報を改めて加工(知識の関連づけを)し直すことが必要になるという点で、「思考・判断・表現」の問題としては妥当性が高い。また、ノートの一部が消えていた(問題箇所が、そんなキレイに消えるのかという点でリアルさに課題はあるが)という探偵小説を連想させるような謎解きの演出があり、児童に興味をもたせテストに取り組みせるといふ工夫がされている。

このような優れたテスト問題を数問選び、コ

ピーして学生に配布するとともに、作成者に工夫した点についてプレゼンテーションさせることにより、より質の高いテスト問題を作成する上での留意点を吟味・共有する機会を設けている。

4 おわりに

筆者が小学校社会科教育法で行っている学習評価の指導について簡単に紹介させていただいた。学生にできるだけ体験を通して学習評価について学んで欲しいと願い、実践している。しかし、評価をどのように指導にいかしていくのか(指導と評価の一体化)といった学習評価の根幹部分については、どのような体験をもとに授業を進めていくかについては、まだまだ課題を残している。それは、子どもたちを目の前にした小学校現場との協同なしでは不可能な部分である。

今後は、評価の事実と分析を大学と小学校とが研究を共有していくようにし、それを教員養成につなげていきたい。

# 資料の集め方・見せ方・使い方

ーウェビング図を用いた授業づくり

慶應義塾幼稚舎 おおの 大野 としかず 俊一



私たち東京都の私立小学校の教員は、東京私立初等学校協会（東初協）のそれぞれの教科部会において研修を深めている。社会科研究部では、10年ほど前から「授業の質を高める」ことを目的とした授業研究会を立ち上げて、より具体的な授業づくりの研究を行っている。私はまとめ役の一人として、この研究会の運営に携わってきた。

今回はその中で、私が提案した『資料の集め方・見せ方・使い方』を紹介する。授業研究会のメンバーからたくさんの意見を頂戴したうえで、夏休みに行われる日本私立小学校連合会（日私小連）の夏季研修会にて発表したものである。当日は、これから紹介するワークシートを用いて、集まった先生方でいくつかのグループに分かれ、実際に授業づくりをするワークショップを行った。

## 1. 資料を集める

授業づくりにおいては、学習指導要領に基づき、その単元で何を子どもたちに学ばせたいのかを理解することが一番重要である。そして、教科書を読めば、およその学習の流れがつかめてくる。しかし、ページを読み進めるように、順を追って教科書どおりに学習を行うことは、まるで犯人のわかっている推理小説を読んでいるように感じてしまう。子どものみならず、教師にとっても同じ感覚に陥ることがあるだろう。子どもも教師も授業を楽しむためには、新鮮さが大切である。

ではどうすればよいか。まずは学習指導要領と教科書を読み、内容と流れを把握する。そして、どんな資料を教師が探し、それをどのように子どもと出会わせ、その資料によって子どもたちがどんな学習問題をつかむのかを考える。続けて、どのように問題解決的な学習を展開させるのかを考

え、組み立てていくことが、授業を新鮮なものにする。ここが、教師の腕の見せ所でもある。

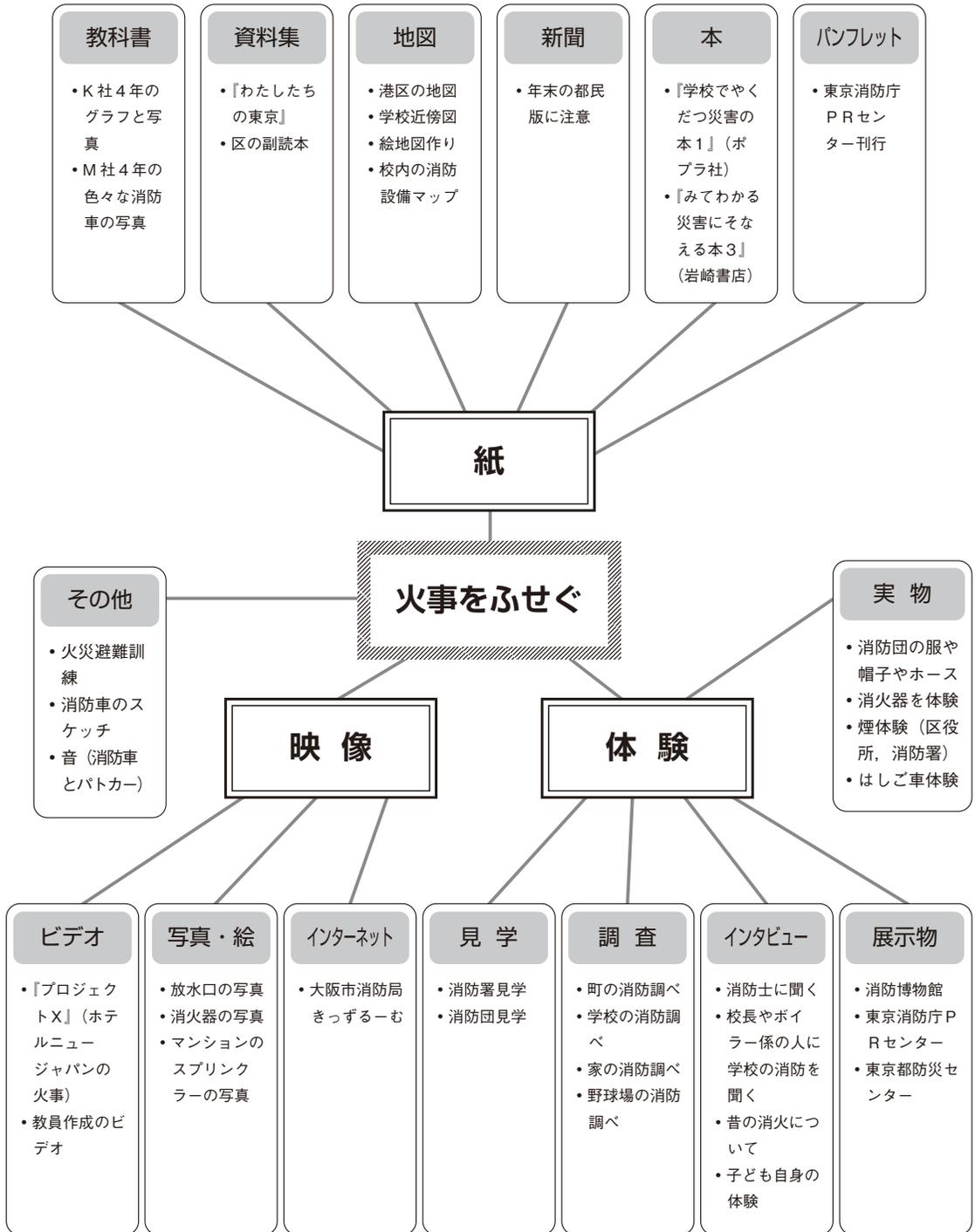
とはいえ、最初から学習過程にぴったり合う資料を探し出すことは時間的にも精神的にもなかなか大変な作業である。そこで、『資料の集め方』ワークシート **図表1** を見てほしい。一つのテーマから連想される言葉をつなげて書き出すウェビングの手法を用いて、たくさんの資料が視覚的にわかりやすく分類されて並べてある。何か良い資料はないかと「探し出す」ことは大変な作業だが、どれにしようかと「選び出す」ことは、それほど大変なことではない。ウェビングの特徴とも言える「分類」がなされた資料を眺めることで、色々な授業のアイデアが浮かんでくることであろう。

授業づくりを始めるにあたっては、ワークシートの中央に単元名を書いて、思い浮かぶ資料を周辺の枠に書き込んでいく。その時には、どんな資料があるのかと、あれやこれやと悩む必要はない。すでに分類されたカテゴリーがあるのだから、それに従って導かれるように書き込めばよい。また、このように周辺の枠を埋めていく作業を行うことで、資料のバランスもわかる。「どうも、紙ベースの資料ばかり使った授業になるなあ」ということに気づきやすくなる。すでに『資料の集め方』ワークシートが作られている単元の場合には、そのワークシートを眺めることから、授業づくりを始めていけばよい。



図表 1

# 『資料の集め方』ワークシート



また、教師の中には、とっておきの資料をお持ちの方もいる。それぞれの学校にも、これぞという資料があるに違いない。それらを書き足していくことによって、ワークシートはより充実したものになっていく。一人より二人、一校より二校の知恵が集まるほうがより良くなる。今回掲載している資料も、最初に私が考えた資料に、授業研究会のメンバーのアイデアが書き足されていったものである。さらに、読者の先生方が書き足してくだされれば、もっと良くなる。それを眺めることで、授業のイメージはもっと湧いてくる。ここが、今回の提案のポイントである。

なお、今回、資料と呼んでいるものは、紙ベースによるものだけを指してはいない。**図表1**を参照していただければわかるが、ベースとなるものを「紙」と「映像」と「体験」という三つに分類して、これら全てを資料と呼んでいる。個人的な感想でいえば、人と出会い、人から学ぶという、「人」という資料こそが、最高の学習素材だと思っている。次に「実物」。実物との出会いによって、子どもの心が生き生きと動き出す。しかし、いつでも「人」や「実物」との出会いを用意するわけにもいかない。そこで、それを補う意味でも、「映像」や「紙」の資料の活用が有効となる。もちろん、高学年になったら、表やグラフを読み取る活動が重要となってくる。そこに隠されている事実は何だろう、とあれこれ考える活動は、子どもにとっても楽しい活動となるだろう。



▲「人」と出会い、学ぶ

## 2. 資料の「適材適所」を考える

授業づくりを料理に例えるとわかりやすい。キッチンには、新鮮な材料（資料）がたくさん並べられている。ここからは、「さあ、料理（授業）を作るぞ」ということで、集めた材料のうち、どれをどのように使うかを考えることになる。学習指導要領に従い、栄養価を確認したら、フレンチなのか中華なのかイタリアンなのか、どんな料理を作るかを考える。新鮮な材料を使って、おいしく、子どもが喜ぶ料理を作り出せるかどうかは、料理人、すなわち教師の腕次第だ。

資料を適材適所に配置するためにはどうすればよいか。ここで、『資料の適材適所』ワークシート**図表2**を見てほしい。例えば、「導入」欄の上から二つめには「消防署見学」があるが、この資料は「導入」欄にも「展開」欄にも記入されている。どちらの場面でも、有効な使い道が考えられるからだ。しかし、評価としては、導入で使うには△、展開として使うには◎、ということの意味している。

実際には、「この資料はどこで使うのがベストか？」ということを考える過程は、このように書き表さなくても、教師の頭の中で無意識のうちに行われ、適材適所に配置されていることのほうが多いようである。しかし、改めて書き表すことで、考えが整理されたり、新たに気づいたりすることもあるはずだ。



▲「紙」の資料の活用

図表2

# 『資料の適材適所』ワークシート

～資料のよりよい使われ方のために～

	資料	評価	備考
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>・『プロジェクトX』</li> <li>・消防署見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎</li> <li>△</li> </ul>	<p>火事の恐ろしさに触れられる貴重な資料となる。</p> <p>いきなり体験を導入にもってくるというのも一つの作戦。一気に関心が高まる。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真の拡大図</li> <li>・サイレンの音</li> <li>・パンフレット</li> <li>・火災避難訓練</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎</li> <li>△</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul>	<p>クイズ風楽しく単元が始められる。</p> <p>クイズ風楽しく単元が始められる。</p> <p>パンフレットの中の数字を取り上げて、クイズ風に単元が始められる。</p> <p>タイミングが合えば、避難訓練の意識改革も。</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞</li> <li>・校内図</li> <li>・学校近傍図</li> <li>・防火責任者にインタビュー</li> <li>・消防署見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○</li> <li>◎</li> <li>○</li> <li>◎</li> <li>◎</li> </ul>	<p>タイムリーな情報で興味を喚起させる。</p> <p>消防施設探しに有効。</p> <p>消防施設探しに有効。</p> <p>それまでの学習のまとめとしても、また新たな学習課題を見つけ、興味をさらに膨らませるうえでも有効。</p> <p>それまでの学習のまとめとしても、また新たな学習課題を見つけ、興味をさらに膨らませるうえでも有効。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・パンフレット</li> <li>・国語の教科書4年『ポスターセッションのやり方』</li> <li>・国語の教科書4年『キャッチコピーの作り方』</li> <li>・ポートフォリオ</li> <li>・消防博物館</li> <li>・本所防災館</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎</li> <li>○</li> <li>○</li> <li>◎</li> <li>○</li> <li>○</li> </ul>	<p>新聞作りやポスター作りの参考として。</p> <p>ポスターセッションの参考として。</p> <p>新聞作りやポスター作りの参考として。</p> <p>紙芝居作りの参考になる。</p> <p>消防の歴史が詳しくわかる。</p> <p>煙体験、消火体験、通報訓練などの体験を通してまとめの学習とする。</p>

◎是非お勧め ○お勧め △児童の様子に応じて

### 3. 資料の見せ方・使い方を決める

さて、いよいよ料理となる。

適材適所に配置されていた材料だとしても、そのまま子どもたちに提供するわけにはいかない。資料の提示の仕方をひと工夫したり、資料を出す順番を吟味したりする必要がある。また、資料によって、子どもたちがどのような活動を展開でき

るかも見通しておきたい。

はじめに、「導入」を考える。導入ではどの資料を使うかを『資料の適材適所』ワークシート **図表2** から選ぶ。今回の単元「火事をふせぐ」では、◎がついている二つの資料のうち、どちらかを選ぶことになる。その結果、私の授業では、「写真の拡大図」のほうを選んだ。それを『資料の見せ方、使い方』ワークシート **図表3** の「資料」

欄に書き、続いて、その資料を用いた活動の展開の見直しを書き込んでいった。

次に、「展開」を考える。ここでも、どの資料を使うのか、そして、それに伴う活動の展開を考えて書き込んでいく。こうして、「選ぶ⇒あてはめる」という作業を繰り返し、『資料の見せ方、使い方』ワークシートを埋めていく。もちろん「こんな活動がしたいのだが、どんな資料があるのかな？」という、逆の発想で考えても構わない。

以上のように、資料に焦点を当てた授業づくりを提案してみた。資料を分類し、整理することで、資料の活用の垣根を下げ、子どもの活動を見通すことが容易になると思う。

研修会当日のワークショップでは、たくさんの先生方によって、資料に対する知恵や経験が、そして教育への熱意が共有された。こうした共有こそが、貴重な経験であると考えている。参加された先生方には、感謝をしたい。

図表3

## 『資料の見せ方、使い方』ワークシート

### 単元名 火事をふせぐ（9時間）

**学習目標** 火災が発生したときの消防署や関係機関の働きと協力の仕組みを見学したり、資料から調べたりして理解するとともに、消防署や関係機関で働く人の工夫や努力、地域の人々の協力などによって、安全な生活が営まれていることを考えることができるようにする。

	時数	資料	活動
導入	1	<ul style="list-style-type: none"> <li>写真（町の消防施設・学校の消防施設・家庭の消防施設）</li> <li>消防団の帽子</li> </ul>	一部を拡大した写真を見て、クイズ風に何の写真かを考え、発表させる。これから消防の学習であることを確認する。
			学習マップ（イメージマップ）を作ろう ⇒まずは、学校の施設について調べよう。
展開	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>デジカメ</li> <li>校内マップ</li> </ul>	班別に学校内の消防施設について調べる。場所を決めて役割分担する。
		<ul style="list-style-type: none"> <li>デジカメまたはスケッチ</li> </ul>	週末を利用して、町にある消防施設について各自調べる。（宿題）
	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>事務長インタビュー</li> </ul>	学校内の消防施設について質問をする。

	4	<ul style="list-style-type: none"> <li>拡大した校内マップ</li> <li>各自で作った資料カード</li> </ul>	学校の消防マップをまとめる。 各自で学校内の資料カード作りをする。
	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自で作った資料カード</li> </ul>	町にある消防施設についての発表 ⇒消防署の見学を検討する。
	6 7	<ul style="list-style-type: none"> <li>消防署見学</li> </ul>	消防署見学
	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>見学メモ、写真、パンフレット</li> </ul>	消防署見学を終えて感想の話し合いとまとめ 消防署の資料カードを作る。
	9 本時	<ul style="list-style-type: none"> <li>各自で作成した資料カード</li> </ul>	「もしも理科室（本館）で火事が起きたら」の質問を班で考えて発表する。 班で自分のカードを持ち寄り、紙芝居風に消火までの流れを考える。
まとめ		<ul style="list-style-type: none"> <li>防火服の実物</li> </ul>	まとめの話し合い 火事から自分の身を守るための姿勢をもつ 火事を防ぐための姿勢をもつ ⇒初期消火の大切さ 消防団の防火服を着装体験をする。 ⇒地域の人々の協力によっても安全が守られていることを確認する。

# 「学んで楽しい」「教えて楽しい」社会科授業を広める

～「問題解決的な学習」を一般的なものにする取り組み～

東京都世田谷区立塚戸小学校主任教諭 うちだ 内田 みのる 稔



## 1. 子どもにとって先生にとって、楽しい社会科

本校は、一昨年、世田谷区教育委員会研究奨励校として、「問題解決的な学習を通して、自ら考え表現する子を育てる指導法の工夫」を主題に、社会科の研究発表を行った。

この研究を通して確かめられたことがいくつかある。その中でも特に顕著な点は、社会科は、子どもにとって「学んで楽しい」教科であり、先生にとって「教えて楽しい」教科である、ということである。子どもたちの8割以上が社会科を「好き」「まあ好き」と肯定的に受け止めている。

しかし、一般的にはどうだろうか。ある調査\*の結果では、子どもが「好きでない」と答えた割合も、教師が「指導を苦手とする」と答えた割合も、ともに5割を超え、主要4教科の中で社会科が1番高い。

これはなぜなのか。

\*ベネッセ教育総合研究所「学習基本調査」より

## 2. ギャップの背景

キーワードは、「問題解決的な学習」。これが定着しているかいないかではないか。

教師が一方的に解説をする講義型の授業は、答えを最初から教えてしまうクイズ番組のようなもの。誰も見たいと思わない。「問題解決的な学習」には、証拠を集めて推理し、事件を解決する探偵になったような、わくわくする楽しさがある。

子どもたちが問題意識をもち、予想を立て、その解決のために資料から必要な情報を読み取り、それらを根拠に思考を働かせて問題を解決する。そのようにきちんと組み立てられた「問題解決的な学習」の中で、子どもたちは上記のような楽し

さを味わい、社会科を好きになる。

わかり切っていることなのだが、そうは言っても「問題解決的な学習」がなかなか定着しない。その原因は、一つは、社会科における「問題解決的な学習」の流れが十分に理解されていないということ、もう一つは、「時間がない」ということではないだろうか。

「問題解決的な学習」を実践しようと思えば、単元でおさえるべき知識の把握に始まり、指導計画、子どもに問題意識をもたせるための資料、発問、活動の吟味、追究のための資料の用意や見学先の交渉・手配などなど、準備に多大な時間がかかる。社会科の指導に特に力を入れている教員ならばともかく、そうでなければ、これだけの時間を確保することは容易ではない。

では、どうするか。

## 3. 塚戸小学校での取り組み

本校では、「問題解決的な学習」を校内、校外へ広めるために、次の四つの取り組みを行ってきている。

一つめは、「問題解決的な学習」の構造をシンプルに示すこと。二つめは、学年に一人、社会科指導のリーダーをつくること。三つめは、校内で定期的に社会科勉強会を開催すること。四つめは、「学習問題できるまで表」を作成することである。

### ● 「問題解決的な学習」の構造をシンプルに示す

本校の研究において、特に大事にした点である。

「問題解決的な学習」の要素を単純化すると、①知識を習得する活動、②知識を活用して思考する活動、の二つとなる。これらを「つかむ」「調べる」「まとめる」の学習過程の中に位置づけることで、

問題解決的な学習の流れをわかりやすくまとめた（資料1）。

さらに、子どもたちが「自ら調べ、考え、表現する」ために必要となる要素を明らかにし、問題解決的な学習の構造を図解化した（資料2）。

これらをもとに、教員間で、「問題解決的な学習」の流れ・構造の共通理解を図った。

● 学年に一人、社会科リーダーをつくる

イメージを共有しただけでは、実践に移れない。先述したように「時間」の問題もある。そこで重要なのが「社会科リーダー」で、学年内の役割分担の一つとして位置づける。教員間で担当の教科を決めるということはよくあると思われるが、特に社会科で「問題解決的な学習」を行おうと考えるならば、計画・準備に時間と労力を注げる中心者を決めておくことは大変有効である。このリーダーが中心となって、単元の計画、資料の準備などを行い、学年内で共有する。そして、先行して授業を進め、学年の社会科指導が「問題解決的な学習」となるよう導いていく。

その際に留意する点は、「調べる」場面での資料は、あくまでも「教科書」「副読本」を基本とする、ということである。社会科の指導に力を入れている教師であれば、自作の資料を用いることも多いであろう。しかし、それを学年で共有しようとす

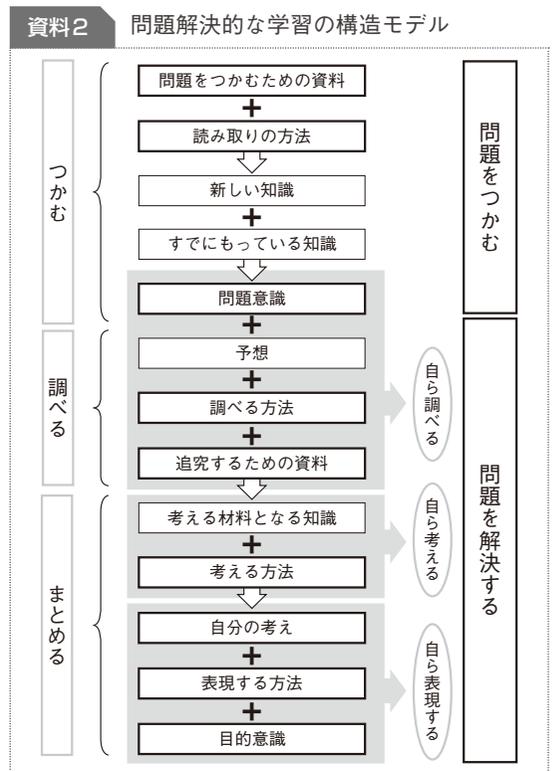
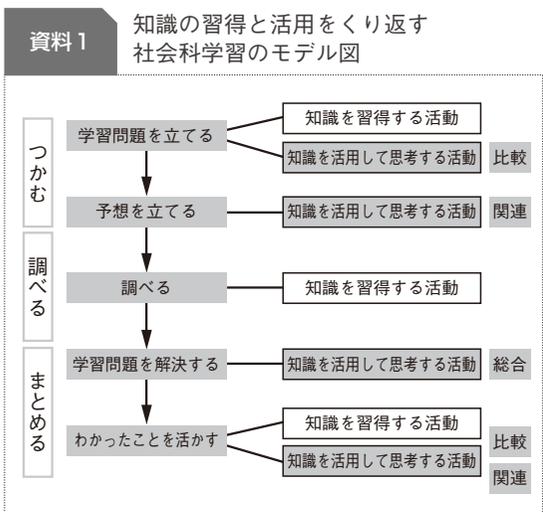
ると、学級によって情報の処理力や読み取る力、文脈や意図の理解度などに大きな差があるため、使える・使えないが分かれてしまうことも考えられる。

目的を、「問題解決的な学習」の普及—自分の学級のみならず、学年の子どもたち、教員の社会科に関する力を引き上げることに置くならば、どの学級でも使いやすい教科書・副読本を追究の資料とすることが妥当であろう。また、自作の資料を使う場合でも、学年の児童の実態に合わせ、情報の吟味・精選をすることが大切である。

しかし、現実には、単学級という場合や、学校の中に社会科を得意とする教員が少ない、という実態もあるだろう。そこで重要になるのが、教員同士が学び合う場をつくるということである。

● 校内で社会科勉強会を開く

本校では、若手教員の育成や、「問題解決的な学習」を校内・校外に普及させることを目的として、隔週に1回、有志による自主的な社会科の勉強会



を行っている。その名も「塚戸社会科の会」、略して「塚社」である。

「塚社」では、社会科指導に力を注いできた教員たちが中心となって各学年の実践単元について検討を行うことで、「問題解決的な学習」の進め方や、資料・発問・学習活動に関する理解を深め合っている。それぞれの教員は、これまでに受けもってきた学年も違えば、得意とする単元も違う。一人一人の経験と知恵を交流することで、よりよい授業のアイデアが生まれる。また、若手の教員にとっては、よい刺激を受けられる貴重な学びの場となっている。

なかでもとりわけ力を入れているのは、「つかむ」場面の検討である。学習問題の設定さえうまくいけば、少なくとも「問題解決的な学習」の流れをつくることができる。「調べる」場面では扱う資料を基本的に教科書、副読本と定めていけば、学習問題設定以後、大まかな学習の流れについては、どの学級でもある程度見通しを立てることができるものだ。

その単元の中心概念は何か。そこに迫ることができる学習問題はどのようなものになるか。その学習問題を設定するために、どのような資料を子どもたちにおつけ、何を問い、どう活動させるか。これらの点を明らかにし、それぞれの学年にもち帰って共有することで、校内における「問題解決的な学習」の普及を図っている。

こうした検討を経て明らかになった各単元の学習問題設定場面での指導法を、校内だけに留めておくのはもったいない。ぜひ、校外にも発信していこう、と語り合い、生まれつつあるのが、「学習問題できるまで表」(資料3 → 14 ページ)である。

#### ● 「学習問題できるまで表」を作成する

「塚社」の中心となっているメンバーそれぞれが、これまで積み重ねてきた自身の実践をふり返り、3年から6年までのすべての単元における「つかむ」場面の指導について、①中心概念、②おさえるべき内容、③学習問題、④資料、⑤発問、⑥学習活動、

の6点を明確にして、「学習問題できるまで表」を作成している。

社会科の指導案を見ても、「～という主旨の学習問題を設定する」との一文が書いてあるだけの場合がある。どのような資料を使い、どういう活動をさせ、何を読み取らせ、どう問いかければ、その学習問題を設定できるのか、具体的にイメージできないことも多い。これらを、だれが読んでも授業場面としてははっきりとイメージができるレベルにまで具体化し、図表化して、共有できるようにする。それによって、社会科をあまり得意としない教員や若手の教員が、「問題解決的な学習」に取り組みやすいようにしたいというのが、意図するところである。

また、社会科の授業準備の中で、資料の収集、精選、作成・加工などは、時間と労力を要する作業である。社会科を専門としない教員にとっては、その時間を確保することは並大抵ではできない。

そこで「塚社」では、「学習問題できるまで表」とともに、そこに記載されている資料についても、PDFなどにデータ化してすぐ使える形にすることで、だれでも、簡単に、社会科で「問題解決的な学習」が実践できるようにしたいと考えている。現在、検討と資料作成の作業を進めているところである。

## 4. 課題と展望

子どもにとっても教師にとっても「楽しい」社会科を広めるためには、もう一つの課題があるように思う。それは、社会科で身につく技能とその指導のポイントを具体的にすることである。

学習を通して、できなかったことができるようになる。その技能を繰り返し活用し、習熟していく。それは子どもたちの確かな自信となり、意欲となる。それは「成長する喜び」という、より本質的な学びの楽しさでもある。

今後、「何のための社会科研究なのか」、この一点を見つめ、尊敬する仲間たちとともに、研究の歩みを進めていきたい。



# 防災の取り組みに対する 参画意識を高める授業のあり方

～第5学年「自然災害の防止」の実践を通して～

岩手県盛岡市立城北小学校主幹教諭 井藤 聡

## 1 本実践のねらい

第5学年社会科の「自然災害の防止」は、今次の改訂において新たに追加された内容である。ここでは、我が国では地震や津波、火山の噴火、土砂災害などのさまざまな自然災害が起こりやすいこと、その被害を防止するために国や都道府県などがさまざまな対策や事業を進めていることを調べ、その意義や大切さについて考えていくことが主たるねらいとなる。

また、環境保全のためには国民一人一人の協力が必要であることや、日頃から防災意識を高めることが大切であることに気づかせるとともに、子どもたち自身にも防災のためにどのように行動すべきなのかを考えさせることが大切である。

## 2 自然災害の防止を取り上げることの重要性

我が国では、地理的な条件によって昔から自然災害が多く起こっており、国民生活と自然災害は密接な関連をもっている。

特に、平成23年3月11日に発生した東日本大震災は甚大な被害を及ぼした。この震災を教訓として、防災に対する取り組みを見直していかなければならないという気運が社会的な動きとして高まっており、特に大きな被害を受けた地域にとっては、今後、防災と復興の取り組みをどのように進めていくのが喫緊の課題となっている。

## 3 児童の実態と実践上のポイント

本校の子どもたちにとって、東日本大震災の記憶はまだ新しい。岩手県内をはじめ東北地方の被害の状況についてもよく知っており、防災に対する関心は全体的に高いといえる。

しかし、我が国全体での自然災害の発生状況や、

防災のために国や都道府県、市町村がどのような対策を行っているのか、自分が住む地域ではどのような取り組みを行っているのかということについては、漠然とした知識にとどまっている子どもが多い。

そこで、本単元の指導にあたっては、国や都道府県等の公共団体及び町内会等の地域における防災の取り組みを具体的にとらえさせるとともに、災害遺構を保存したり、小学生が災害の伝承に取り組んだりしている長崎県島原地方の事例を取り上げることを通して、防災の取り組みに対する参画意識を高めたいと考えた。

本単元の構想及び実践にあたっては、以下の4点を重視した。

### ● 切実な問題意識に基づく学習問題の設定

単元の導入では、我が国の国土について災害の起こりやすさという視点から改めて概観させるとともに、自然災害の被害の状況を伝える映像や写真などを通して自然災害のもたらす被害の大きさについて考えさせ、「災害から人々の生活を守るために、どのような取り組みが行われているのだろう。」という切実な問題意識へと結び付け、単元全体の追究の見通しを明確にもたせていく。

### ● 指導計画の工夫と追究内容の明確化

教科書（教育出版『小学社会5下』）では、本単元は1時間扱いで、国や地方公共団体等による防災の取り組みを中心的に扱っている。

本実践では、追究する内容を「国や都道府県等による防災の取り組み」と「災害遺構の働きと災害の伝承」の二つに分け、2時間扱いとすることで、追究したり考えたりする内容が明確になるようにした。

指導計画（2時間扱い）

段階	主な学習活動	評価基準（観点）⇒評価方法	資料等
<p>〈第1次〉 自然災害から守る (1時間)</p>	<p>○我が国で起きた主な自然災害について調べ、その特徴をとらえる。 ○自然災害によってどのような被害が発生するかを話し合い、学習問題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【学習問題】自然災害から人々の生活を守るために、どのような取り組みが行われているのだろう。</p> </div> <p>○学習問題に対する予想を交流し、追究の見通しをもつ。 ○自然災害を防ぐ取り組みについて調べる。 ○調べてわかったことを交流し、自然災害を防ぐための取り組みについてまとめる。 ○自然災害を防ぐための取り組みについて考えたことについて話し合う。 ○本時の学習をふりかえり、自分の考えをまとめ表現する。</p>	<p>・我が国の自然災害の特徴についてとらえている。 (知) ⇒発言</p> <p>・自然災害を防ぐための取り組みについて、「だれが」「どのような」という視点で自分なりの予想をもっている。 (思) ⇒ノート・発言</p> <p>・自然災害を防ぐための取り組みにはどのようなものがあるか理解している。 (知) ⇒発言・ノート</p> <p>・自然災害を防ぐための取り組みや自分たちができることについて考えている。 (思) ⇒ノート</p>	<p>・写真（台風・洪水等）</p> <p>・資料集</p> <p>・写真（緊急地震速報・のり面工事・ハザードマップ等）</p>
<p>〈第2次〉 災害を伝える (1時間)</p>	<p>○火砕流が迫る小学校の写真を見て気づいたことを話し合う。 ○雲仙普賢岳の噴火の様子について映像や写真などを通してとらえる。 ○旧大野木場小学校被災校舎の写真を見て疑問に思ったことを話し合い、本時の学習問題を設定する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>【学習問題】新しい校舎があるのに、古い校舎がそのまま残されているのはなぜだろう。</p> </div> <p>○学習問題に対する予想を話し合い、追究の見通しをもつ。 ○被災校舎が保存されている目的について調べ、わかったことを出し合う。 ○大野木場小学校のさまざまな取り組みについて気づいたことを出し合い、被災体験を伝えることの意味について話し合う。 ○雲仙普賢岳周辺には多くの災害遺構や災害記念館などがあることをとらえ、その意義について話し合う。 ○本時の学習をふりかえり、自分の考えをまとめ表現する。</p>	<p>・被災校舎が残されている理由について関心をもち意欲的に調べようとしている。 (関) ⇒発言</p> <p>・災害遺構や災害記念館などが防災及び復興のために大切な役割を果たしていることを理解している。 (知) ⇒ノート・発言</p> <p>・災害遺構や災害記念館などが防災及び復興のために大切な役割を果たしていることについて、自分の考えをもち表現している。 (思) ⇒ノート</p>	<p>・写真（火砕流が迫る大野木場小学校）</p> <p>・映像（火砕流の様子）</p> <p>・写真（大野木場小学校新校舎と旧被災校舎）</p> <p>・読み物資料</p> <p>・写真（災害記念館他）</p> <p>・写真・映像（雲仙岳災害記念館、土石流被災家屋保存公園他）</p> <p>・映像（ジオパークの認定を報じるニュース）</p> <p>・パンフレット（島原世界ジオパーク）</p>

### ● 災害の経験を防災に生かしている事例に関わる教材開発

第2次で中心教材として取り上げる南島原市立(被災当時は深江町立)大野木場小学校は、平成3年9月に雲仙普賢岳の噴火にともなって発生した火砕流により校舎が全焼した。幸いにも人的被害はなかったものの、当時の児童や教職員は長期にわたって避難生活や仮校舎での不便な学校生活を余儀なくされた。

その後、およそ1km離れた場所に新しい校舎が建設されたが、被災した旧校舎は災害遺構として保存されることとなった。

また、大野木場小学校では、噴火による被害を直接受けた学校として、災害の記憶を後世に残すべく、「メモリアルデー」や「災害記念文集」等の取り組みを行っている。さらに、学校の敷地のとなりに建設された「かどわき歴史災害記念館」の清掃を行うなどの取り組みを通して、子どもたちの防災意識を高める工夫をしている。

被災した地域で自分たちと同じ小学生が防災に対してどのように取り組んでいるのかという事実から考えることは、本校の子どもたちが、身近な意識をもって学習問題を追究していくことにつながると考えた。

### ● 参画意識を高めるための「ふりかえり」の記述

防災の取り組みに対する参画意識を高めるために、授業の最後に「ふりかえり」を記述する場面を設定し、自分の考えを表現させた。記述する内容は、①授業を通してわかったこと、②予想と比べてみての考え、の二つを基本に、第2次については、「災害遺構(岩手県内の事例)を保存することについてどう考えるか」という観点を付け加えた。

## 4 授業の実際

本単元は、2時間扱いで授業を進めた。ここでは、防災の取り組みに対する参画意識を高める場面として、第2次「災害を伝える」の授業から、主要な部分を紹介する。

### ① 導入段階——学習問題を設定する

(火砕流が迫る大野木場小学校の写真を提示する)

T：写真を見て気づいたことを発表しましょう。

C：灰色の煙のようなものが学校に迫っています。

C：火山が噴火して、その噴煙が学校に迫っているのだと思います。

C：校庭で先生らしい人が避難を呼びかけています。

C：小学生が避難しようとしています。

T：これは、長崎県の雲仙普賢岳という火山が噴火した時に発生した火砕流が、深江町の大野木場小学校に迫ってきている様子です。地図帳で普賢岳の場所を確かめましょう。

(普賢岳の噴火について概要を説明し、平成3年6月3日に発生した火砕流の様子をおさめた動画を見せる。火砕流がおおよそ800度で、速さが時速100kmであることや、たくさんの犠牲者が出たこと、大野木場小学校には火砕流が到達せず、児童や教職員が無事に避難したことなどを伝える)

T：この時の火砕流はこの校舎まで来ませんでした。同じ年の9月15日に発生したもっと大きな火砕流によって、校舎は柱や壁などを残して焼けてしまいました。その後、少し離れた場所に新しい校舎ができました。



▲現在の大野木場小学校

T：古い校舎はどうなったと思いますか。

C：取りこわされてなくなっていると思います。

C：取りこわされて、記念碑などが立っていると思います。

(被災した校舎があった場所を撮影してきた動画を見せ、写真を提示する)



▲保存されている被災した校舎

C：新しい校舎ができて、古い校舎は使わないのに、どうして残しているのかなと思いました。

#### 【学習問題】

新しい校舎があるのに、古い校舎がそのまま残されているのはなぜだろう。

#### ② 追究段階——学習問題を追究する

学習問題に対する予想を話し合い、  
追究の見通しをもつ

T：古い校舎が残されているのは、なぜだと思いますか。

C：校舎を取りこわすのにはお金がかかるから、そのままにしているのだと思います。

C：普賢岳の近くで危険なので、取りこわすことができなかったのだと思います。

C：火砕流がとてつもないものだというのをみんなに伝えるために残しているのだと思います。

T：みんなというのはどういう人たちですか。

C：この災害のことを知らない子どもや、他の県などから来た人たちです。

T：こわいことを伝えると、どんないいことがあるのでしょうか。

C：こわいということがわかっていれば、噴火が起きた時にすぐ避難したり、事前に災害に備えたりすることができると思います。

資料をもとに学習問題についての追究活動を行う

大野木場小学校の平井節朗校長先生（平成24年度当時）からお聞きした話を再構成したものを、読み物資料として使用した。

#### ○大野木場小学校の校長先生のお話

平成3年9月15日に発生した最大規模の火砕流のため、大野木場小学校の校舎は全焼してしまいました。新しい校舎は1kmほど離れた場所に建てられました。

もとの校舎は土石流や火砕流の危険地域にあるため、取りこわす計画でしたが、噴火災害の記憶を風化させないために保存すべきだという声が上がリ、国・県・町で話し合いをして保存することに決まったのです。この被災校舎は火砕流が直撃したときのまゝの状態に保存され、すぐそばには「砂防みらい館」も建設されました。火砕流のすさまじさを伝え、防災に対する意識を高めるための施設として活用されているのです。また、毎年春の遠足のときには大野木場小学校の子どもたちがここを訪れ、災害の様子や防災について学んでいます。

その他にも、大野木場小学校では災害の記憶を風化させないための取り組みを行っています。まず、校舎が焼けてしまった9月15日に毎年「メモリアルデー」という行事を行い、災害を経験した方々からお話を聞いています。また、記念文集を作り当時の小学生の作文を残したり、メモリアルデーの感想を残したりしています。

さらに、平成16年には学校の敷地のとなり「かどわき歴史災害記念館」が建設され、災害や復興の記録を伝える資料が展示されています。この記念館は子どもたちが清掃をするなど管理を行っています。

このように、大野木場小学校では災害の体験を子どもたちが語り継いでいくことによって、人々が災害の記憶を忘れることなく防災への意識を持ち続けられるようにしています。これは、噴火の被害を直接受けた唯一の学校の使命として、これからもずっと続けていかなければならないことだと思います。

T：学習問題について、わかったことを発表しましょう。

C：災害の記憶を風化させないために、校舎を保存しています。

C：春の遠足の時には子どもたちが実際に旧校舎に行き、防災のことを学んでいます。

C：毎年メモリアルデーを行って、災害を経験した人からお話を聞いています。

C：災害記念文集を作っています。

C：歴史災害記念館の掃除に子どもたちも協力しています。

### ③授業後の「ふりかえり」の記述から

授業の最後に、「ふりかえり」を記述させた。記述するポイントとしては、「今日の学習でわかったこと」「予想と比べてどうだったか」「被災した建物などを保存することについてどう考えるか」の3点を示した。

(子どもたちの記述例)

○大野木場小学校では災害にあった経験を生かして、これから起きる災害に備えていることがわかりました。予想よりもたくさんの取り組みが行われていておどろきました。

被災した建物を保存するのも大切だけれど、その建物を見るとつらい記憶を思い出す人もいるから、建物を保存するときには、みんなの意見を聞いた方がいいと思いました。

○わかったことは、噴火の災害の記憶を風化させないために行事などの取り組みをしているということです。私は被害の様子を伝えるために校舎を保存していると予想しましたが、合っていました。

自分たちも、災害の記憶を「風化させない」ためにできることに取り組んでいきたいです。

○大きい噴火が起きると広い範囲にわたって被害が出て大変だということがわかりました。みんなで予想していた通り、校舎は被害の様子を残すためだということでした。

私は、東日本大震災で被害を受けた三陸海岸にある建物は、保存した方がいいと思います。そうすれば次に津波が来た時の犠牲者が減ると思います。

○火山が噴火して家や学校などが焼けてしまっても、建物などを保存しておくことによって記憶を風化させないことが大切だということがわかりました。

たしかに時間もお金もかかるから建物を取りこわせないという考えもあるけど、やっぱり災害が起きたことを忘れないようにするために保存することが必要だと思います。

今すぐに自分ができることは思い浮かばないけど、もっと災害のことについて調べてみたいと思います。

## 5 終わりに～実践をふりかえって

本実践では、被災した小学校における防災への取り組みを調べることを通して、防災のためには記憶を風化させないことも大切であることを考えさせることができた。また、実際に岩手県内においても同じような取り組みが進められていることをとらえることで、こうした事例を自分との関わりで考えさせることができ、防災の取り組みに対する参画意識を高めることができた。

また、ジオパークの認定について取り上げることで、島原半島では、防災の取り組みがまちの復興ともつながっていることに気づかせることができた。その結果、災害後の復興に対する関心意欲を高めることができた。

今後は、防災と復興の取り組みが実際に行われている事例を教材として開発し、災害後のまちづくりのあり方や自分との関わり方について考えさせる必要があると考える。



※本実践は、独立行政法人日本科学技術振興会による平成25年度科学研究費助成事業（奨励研究）の助成を受けたものである。



第11回

まもなく締め切り!!

# 地球となかよしメッセージ

作品募集(2013年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。



応募者全員に  
参加賞が  
もらえるよ!



第10回  
入選作品

## 信友

運動会で私たち6年は、組体操をやりました。その中の2人技、「サポテン」は雨のせいでグラウンドがベチョベチョだったので、やりにくく失敗する人たちがたくさんいました。私の場所もやりにくく、上の子が「もう落としていいよ。」と言ってくれましたが、小学校生活最後の運動会だったので、絶対成功させたくて、「大丈夫。まかせて!」と言うと、上の子は「分かった。」と言ってくれました。その言葉がとてうれしくてうれしくてたまりませんでした。まるで、「信じてる。」と言ってくれているようでした。そのしゅん間、「サポテン」は成功しました。

応募資格

小学生・中学生(数名のグループ単位での応募も可)

応募期間

2013年7月1日～9月30日  
詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。

作品  
テーマ

- ①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境や生き物を守るための取り組み
- ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交流、国際理解に関すること
- ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会

◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

\*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>



教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

小学社会通信 まなびと [2013年 秋号] 2013年8月30日 発行

編集:教育出版株式会社編集局

印刷:大日本印刷株式会社

発行:教育出版株式会社 代表者:小林一光

発行所:教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- 北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F  
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
- 函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F  
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
- 東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F  
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
- 中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F  
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
- 関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F  
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
- 中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F  
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
- 四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F  
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
- 九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室  
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
- 沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F  
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411